

## 特集

# 学生でないとできない活動

高梨直紘（天プラノ東大 EMP）

### 1. はじめに

2018年の年会では、「みんなで楽しむ天文・宇宙」をテーマにさまざまな発表があった。その中には学生による発表もいくつか含まれており、総じて魅力的な内容であった。これからの日本の天文教育普及を考えていく上で私たちがもっと深く彼らを理解し、ともに議論していく場を増やしていかなくてはならない、と感じさせるには十分な内容であったように思う。現在、日本天文教育普及研究会の会員に占める学生会員の割合は全体の6%に過ぎない。これが他団体に比べて、あるいは、過去の本会に比べて多いのか少ないのかは、私には分からない。しかし、私が個人的に知っている天文教育普及活動に携わる学生の多くが本会に入会していない、という事実から考えると、望ましい状況とは言えないだろう。このような状況を改善し、学生にもより開かれた会にしていくためには、まず私たちが彼らの活動をよく知ることが欠かせない。本会の将来のあり方はもちろんのこと、天文学と社会のこれからの関係を構想していく上でたいへん有意義であろう。

今回の関東支部研究会のテーマ「学生でもできる、学生だからできる、天文教育普及」も、そのような文脈を踏まえての設定であったと思われる。このテーマ設定は、私にはなかなか味わい深く感じられた。「学生でもできる活動」という表現は、私が解釈するに“学生よりも、より優れた存在”（おそらく大人）を前提としている。既に活動の枠組が先人によって示されており、習熟を通じて完成度を上げていく種類の活動がそれに相当するだろう。これらの活動に関しては、経験ある“大人”が、経験の足らない“学生”に対して有

意義な助言をすることも可能である。

もちろん、学生にとって諸先輩から学ぶべきことも多いだろう。実際、大人からの助言に真剣に耳を傾け、それを一生懸命活かそうとしている姿を目にすることも多い。しかし、敢えて言えば、私は大人の助言を意識的に聞き流して良いと思う。学生はもっと自分の価値観を信じ、自由に発想し、好きなように自分自身をデザインしていった方が良い。その上で、必要に応じて大人からの助言も取り入れれば良い。大人は得てして学生を子ども扱いしがちであるが、裏を返せば、それは大人の焦りでもある。大人が持ち得ない発想、時間、技術、人脈を使えば、大人には絶対に真似ができない優れた活動をデザインすることだってできるはずだ。

そのような「学生でないとできない活動」を知ることは、たぶん“大人”である私たちにとっても有意義なことである。彼らは、いったいなにを強みとして、その活動をデザインしているのか。その考え方や、それを支える技術等を知ること、自身の活動をリデザインすることもできるだろう。私が信じているものを疑わせ、私に新しい発想を促させるとき、彼らは“未完成の学生”などではなく、“良きライバルとしての学生”になるはずだ。そのような視点から学生の活動に触れれば、きっと得るものも大きいだろう。

そのようなことを考えた時、以前は学生だった私が私の経験を語り、そしてもう学生には戻れない大人として学生に宣戦布告することは双方にとって有意義なことであるように思われたので、そのようにすることにした。

## 2. 学生だった私たちの強み

天文学普及プロジェクト「天プラ」の活動は、私が修士1年生だった2003年に始めた活動である[1]。当時は、渋谷にあった五島プラネタリウムの閉館や池袋にあったサンシャイン・プラネタリウムが相次いで閉館し、天文教育普及業界が大きく揺れていた時期でもあった。そんな中、本会が主催した研究会「プラネタリウムの役割と使命を考える」に参加した私は、素朴に学生でもなにかできることがあるのではないかと考え、同級だった平松正顕さんを誘ってその夏の天文天体物理若手の会で「天文学とプラネタリウム」という題でアイデアを披露したのが活動の始まりであった。

この当時、私たちは“広報普及活動は最先端の研究と両輪になるべし、「天文学」という言葉に対する誤解を放置してはならない”ということを主張していた。しかし、これを聞いてくれた“大人”から「広報というのは、組織がやるものであって、君たちののは違うんじゃない？」と言われたのが、たいへんな衝撃だった。言われてみれば、確かにその通りである。プロの天文学者でもない私たちが、いったいどんな立場から広報や普及について語り、天文学全体を担うような分不相応に思えることを言えるのであろうか。自身が拠って立つべきところが分からなくなった私たちは、その後、常に自分たちは何者であるのかを意識するようになっていった。

自身の立ち位置を相対化するには、仮想ライバルを設定するのが良い。私たちがライバルとして最初に意識したのは、プロの天文学者たちである。明らかに経験や知識で劣る私たちが、プロの天文学者と同じことをしても勝てるはずがない。彼らと互角以上に戦うためには、彼らにない自分たちの強みを活かさねばならない。私たちが彼らに優っている点はなんであるのか。それは「若さ」「未完成で

ある事」「柔軟である事」の3点であると、当時の私たちは結論づけた。

「若さ」は、学生がもっとも有利な点である。子どもから見れば年の近いお兄さんお姉さん、大人から見ればかわいい弟・妹分、シニアから見れば応援すべき孫のようなもの。少々の失敗もなんのその、どこにでも飛び込んでいける立場の有利さは、明らかに学生ならではの特権である。天プラにおいてそのような強みを活かした活動としては、小学校の天文部活動である三鷹アストロクラブ[2]を挙げることができる。

「未完成である事」も、学生ならではの強みだ。プロの天文学者に比べれば、まだまだ十分に天文学を理解しているとは言えないからこそ、天文学をよく理解していない人の気持ちが分かる。教える者として答えに向かって導くのではなく、共に答えを探しに行くことができる。その途中で道を間違えることがあったとしても、それが当たり前であって恥じることもない。このような立場でいられることは、科学コミュニケーション的な双方向性を重視する活動においては強みとなる。天プラにおいてそのような強みを活かした活動としては、サイエンスカフェなどの活動[3]や一家に1枚宇宙図の作成[4]を挙げることができる。

「柔軟である事」は、大人になると意外と難しい。社会的な立場を持つ大人は、その立場に囚われてしまう。無礼講と言われて、本当になんでも自由に発言したりすれば、それは大人のルールが分かっていない（と私は思う）。天文教育普及活動に深く関わり始める前段階である学生だからこそ、「日本」の「天文」の「教育」や「普及」の「会」のあり方にも先入観を持たずに疑いを差し挟むことができる。組織に縛られることなく、己の感覚を信じて、自分が面白いと思ったことや楽しいと思ったことを純粹に追究できるのは、学生な

らではの特権であると言えるだろう。天プラにおいてそのような強みを活かした活動としては、トイレットパーパーの作成[5]や六本木天文クラブの活動[6]などを挙げるができる。

### 3. 終わりに

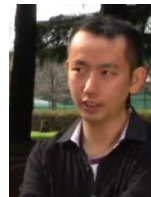
さて、本稿では私の個人的な経験から学生の強みの一例を挙げてみたが、他にも例えば「体力」「気力」「時間」「成長性」「将来性」「センス」「明るさ」「楽しさ」「パワー」「ネットリテラシー」「デジタル世代」「過去の蓄積」「洗練度」「怖い物知らず」「勇敢さ」「つながる力」「社会的サポート」等々、いくらでも強みとできるものを見つけることができるだろう。実際、今回の研究集会で紹介のあった活動からは、学生ならではの強みを多数教えてもらったように思う。

しかし、これらの強みは必ずしも学生だけの専売特許ではない。大人である私たちも、それを意識することで有効に利用できる強みもあるはずだ。ユニークな活動を行っている学生は、いったいどんな強みの中で自身の活動をデザインしているのか。それを知れば、私たち自身の活動をリデザインする上での参考になるだろう。ライバルたる学生の可能性と限界を知り、それを越えた活動を行っていくことで、学生にとっても刺激ある存在としての大人になる。そのような関係を築けて初

めて、日本天文教育普及研究会は学生にとって魅力的な場になるのだと私は考えている。

### 文 献

- [1] 高梨直紘他 (2008) ‘天文学普及プロジェクト「天プラ」の挑戦’, 天文教育, 20(5), 32-39.
- [2] 高梨直紘他 (2015) ‘小学生を対象とした天文部活動’, 天文教育, 27(3), 13-24.
- [3] 亀谷和久他 (2009) ‘天プラの挑戦(5)サイエンスカフェの総括’, 天文教育, 21(3), 40-50.
- [4] 高梨直紘他 (2014) ‘一家に 1 枚宇宙図 2013’, 天文月報, 107(2), 115-120.
- [5] 平松正顕他 (2009) ‘天プラの挑戦(3)グッズ開発で広がる可能性’, 天文教育, 21(1), 36-42
- [6] 高梨直紘他 (2014) ‘暮らしの中に宇宙を：六本木天文クラブの取り組み’, 天文教育, 26(4), 4-17.



高梨 直紘

\* \* \* \* \*